

## キャロルとギャリの物語：母子家庭支援の事例

キャロルは、24歳の白人女性であるが、保健師からキャロルが住んでいる大きな市の地域社会サービス事務所に彼女についての相談が持ちかけられた。キャロルは4歳の息子を折檻してケガをさせたが、保健師はキャロルが息子を虐待しているのではないかと疑ったのである。

二人は地域児童家族チームに回され、ソーシャルワーカーのAさんが担当することになった。Aさんは最初に連絡をしてきた保健師と話すことから介入を始め、保健師が虐待の事実よりもギャリと母親の弱い立場を心配していることを確認した。保健師が言うには、「兆候はすべてある」けれど、虐待の物的証拠はなかった。ワーカーは以前にも事務所にその家族について相談があったかどうか、その他の情報があるかどうかを調べた。

最初の面接で、Aさんはキャロルになぜ送致されたかということ、ソーシャルサービス部の法的責任、ソーシャルワーカーの法律上の義務を説明した。そして、情報を共有する時間を持った。

不安と疑いを持ったことは無理もないが、キャロルはソーシャルワーカーに少しばかり敵意を持ち始めたものの、少しずつ自分の現状を説明した。彼女は、特に、ギャリの子育てについてははっきりしなかった。ギャリは話の間時々泣いたり、母親にねだったりしたので、彼は付かず離れずだったが、中断することが多かった。

年齢相応に、ギャリは活発で、好奇心旺盛で、いたずら好きで、常にまわりついていた。人の見方次第で、彼は悩みの種であったり、刺激が強かったり、退屈であったり、楽しかったり、好奇心があったり、いらいらしている子供である。つまり、典型的に世話のかかる子供であった。

キャロルは、その地域に知り合いはいないし、近所の人も知らないと言った。その市の多くの人びとと同じように、近所の人びとは「冷たい」と思っており、数ヶ月前に越してきて以来、通りで人に話しかけることを怖がっていた。

彼女はパートナーと別れてから家賃が払えず前に住んでいた家を追われた。彼女は今の近所の人びとから歓迎されるとは決して確信できないことをワーカーは察した。キャロルの福祉手当を調べると、受給資格のあることが分かった。

彼女は大家族の長女であったが、前のパートナーと遠くへ家出した。今彼女はギャリの「よい母親」であることにほとんど自信がないとしても、小さい兄弟の面倒をたくさんみてきたことが分かった。

やりとりが進むにつれて、キャロルに、近隣のチームが行っているボランティア活動も含め、利用できる地域のさまざまな資源についての情報が与えられた。キャロルはギャリをボランティアが行っている託児所に連れて行くように誘われたが、そこでボランティアをしたいかどうかをみるためであった。

その見返りは、もしギャリがそこを気に入れば、彼を連れて行った後、キャロルは彼から離れることができるということである。彼女は託児所を援助している近所の母親たちと会えるし、母親たちが子供たちを連れてきたときのお茶会にも参加できる。

ワーカーは、キャロルが託児所でいつも他の人びとと一緒にいられ、そして、ワーカーのスーパービジョンがあれば、自分の子供だけでなく他人の子供の世話をするのになんら危険がないだろうと考えた。

### 山田たつさんの事例

山田たつさんは、70歳で町の公営住宅に一人で暮らしている。先週の日曜日に老人会の花見に参加し、家に帰ってきてから急に腰が痛み、救急車で病院に運ばれた。腰椎の圧迫骨折の疑いがあり、1ヶ月ほど入院したが、退院できることになった。

病院の MSW から住んでいた町の在宅介護支援センターに連絡が入った。センターのケアマネジャーの大川紀夫さんが山田さんに面接し、自宅に帰りたいという希望があるものの、一人で暮らすことは不安であると言われた。息子が他県に住んでいるが、息子のところに行くことは希望していない。施設に入るなら、町の施設に入りたいと言った。

大川さんは、山田さんに介護保険の申請をしてもらい、要介護度3という結果が出た。先ず山田さんの生活、収入、介護全般にわたってアセスメントを行った。

山田さんが自宅で暮らすことを希望しているので、山田さんと話し合い日中はデイサービスとホームヘルプ、週に2回はショートステイ、配食などのサービス、住宅改修、車いす貸与を計画した。また、自宅に緊急通報電話も設置した。

近所の山田さんの知り合いと民生委員に夕方尋ねてもらうことにした。ケアカンファレンスを開いて、サービスの細かな調整を行った。

その後、山田さんは杖をついて歩けるようになり、自分で何回かは食事を作れるようになったので、ヘルパーの仕事の調整を行った。

3ヶ月ほどして、週4回のデイサービス、週2回のホームヘルプ、月に1, 2回のショートステイの利用で在宅生活が送れるようになった。

3年間はこのようなサービスを利用して在宅で暮らしたが、段々身体機能も低下してきた。以前から希望していた町の特養に空きができたので、そこに入所することになった。

- ・ この事例について、ケアマネジャー（ソーシャルワーカー）の関わりでよかったと思われる点は何か。
- ・ この事例で、説明されていない点（説明があれば分かりやすくなった点）は何か。
- ・ その他、気がついた点。